

'19

前期日程

# 教育人間科学系共通 小論文

(教育学部)

## 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は1冊(5頁)、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。





1 次の文章は、レイチェル・カーソン著『センス・オブ・ワンダー』の一節です。  
文章を読んで、下の2つの問いに答えなさい。(問1, 問2で合計400字以内)

問1 大人は、子どもに対し、どのように働きかけるのが望ましいと筆者は考えているか、答えなさい。

問2 教師の立場から、問1で答えたように子どもに働きかけるとすると、どのような工夫が考えられるか、述べなさい。

子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直観力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。

もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。

この感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです。

妖精の力にたよらないで、生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります。

多くの親は、熱心で繊細な子どもの好奇心にふれるたびに、さまざまな生きものたちが住む複雑な自然界について自分がなにも知らないことに気がつき、しばしば、どうしてよいかわからなくなります。そして、

「自分の子どもに自然のことを教えるなんて、どうしたらできるというので

しょう。わたしは、そこにいる鳥の名前すら知らないのに！」

と嘆きの声をあげるのです。

わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。

子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけだした知識は、しっかりと身につきます。

消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません。

もし、あなた自身は自然への知識をほんのすこししかもっていないと感じていたとしても、親として、たくさんのことを子どもにしてやることができます。

(出典：レイチェル・カーソン，上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社，1996，pp.23-26)

**2** 「全国学力・学習状況調査」についての次の説明を読んで、表1～4からわかることを整理して述べなさい。そのうえで、わかったことに基づいて、児童や学校に対して、勉強や授業の方法などについてのアドバイスを述べなさい。(600字以内)

「全国学力・学習状況調査」では、全国の小学校6年生と中学校3年生全員を対象に、教科に関する調査と質問紙調査を行う。また学校に対して質問紙調査を行う。平成29年度の小学校での調査方法は下記の通りである。

1. 調査対象：

全国の国立・公立・私立小学校19,876校と、そこに在籍する小学校第6学年児童1,051,086人。

2. 教科に関する調査：

国語と算数で、第5学年までの内容から問題が作成されている。A問題とB問題があり、A問題では、身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能などを問う。B問題では、知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などが身につけているかを問う。

3. 質問紙調査：

児童質問紙調査は、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関して児童に問う。学校質問紙調査は、指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関して各学校に問い、学校ごとに責任者が回答する。

児童質問紙調査の問68と学校質問紙調査の問17について、質問と回答を整理した結果を、表1・表2に示す。

表1 児童質問紙調査(問68)の質問と集計結果  
 質問 「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、  
 自分の考えを深めたり、広げたりすることが  
 できていると思いますか。」

選 択 肢	%
そう思う	27.0
どちらかといえば、そう思う	41.3
どちらかといえば、そう思わない	24.1
そう思わない	7.3
その他(複数回答など)	0.1
無回答	0.2

表2 学校質問紙調査(問17)の質問と集計結果  
 質問 「調査対象学年の児童は、学級やグループでの  
 話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、  
 広げたりすることができていると思いますか。」

選 択 肢	%
そのとおりだと思う	9.7
どちらかといえば、そう思う	62.2
どちらかといえば、そう思わない	27.3
そう思わない	0.7
その他・無回答	0.2

また、学校質問紙調査(問17)に対する回答と、児童質問紙調査(問68)に対する回答との関連を調べたところ、表3の結果が得られた。これは、例えば、学校質問紙調査の問17に「そのとおりだと思う」と回答した小学校の児童全体のうち、児童質問紙調査の問68に「そう思う」と回答した児童が30.6%いたことを示している。

表3 児童質問紙調査と学校質問紙調査との関連

児童の回答 学校の回答	そう思う	どちらかとい えば、そう思う	どちらかとい えば、そう思わ ない	そう思わない	計
そのとおりだと思う	30.6%	41.1%	21.6%	6.5%	100.0%
どちらかといえば、 そう思う	27.5%	41.4%	23.7%	7.1%	100.0%
どちらかといえば、 そう思わない	24.7%	41.1%	25.8%	8.0%	100.0%
そう思わない	21.1%	39.6%	29.2%	9.5%	100.0%

さらに、児童質問紙(問68)に対する回答と、教科に関する調査問題の正答率との関連を調べると、表4の結果が得られた。

表4 児童質問紙調査の回答と正答率との関連

	児童数の 割合(%)	平均正答率(%)			
		国語A (15問)	国語B (9問)	算数A (15問)	算数B (11問)
そう思う	27.0	78.0	61.5	82.1	50.4
どちらかといえば、 そう思う	41.3	76.2	59.3	80.3	47.7
どちらかといえば、 そう思わない	24.1	72.2	53.9	75.6	42.1
そう思わない	7.3	66.9	47.1	69.4	36.2

調査結果は国立教育政策研究所HPによる。

(<http://www.nier.go.jp/index.html>)









